

回流浪の旅 (五卷)

原作、脚色者 帝キネ 芦屋映畫
監督者 伊藤 大輔氏
若山 治氏
撮影者 河上 勇喜氏

主要役割

春川小鈴 柳 まさ子嬢
成島享一 里見 明氏
ジヤック天榮 小島 洋々氏
前田伍郎 鈴木 泰輔氏
南部明子 鈴木 信子嬢

〔略筋〕小鈴は滿洲廻りのある曲馬團の踊子であつた。座長のジヤック天榮は小鈴を愛してゐたが小鈴には前田伍郎といふ座中のウイオロン弾きの戀人があつた。小鈴の事から二人は争論を起し格闘をする。小鈴は自殺企てるが内地の文學青年成島享一に救はれる。二人は内地へ歸る。小鈴は享一の家に厄介になつてゐる。そのうち享一は小鈴を戀するが彼に許嫁のあることを知つてゐる彼女は聞き入れない。格闘以來消息のなかつた伍郎が突然二人の間に現はれる。小鈴は伍郎を思ひ享一を思ひ迷つた擧句家出する。それを知つた享一と伍郎が後を追ふが既に晚い。享一は自分の戀を捨て伍郎の爲めに小鈴を探しに流浪の旅に出る。

今の日本映畫界に充滿してゐるセンチメンタリズム映畫の適例である。いつまで我々はこの安價なセンチメンタリズムに縋まされるのか。こう上つ調子に走られては反感が起るばかりである。センチメンタリズム決して悪いのではない。純粹に心の中から泌み出してゐるやうなピユウアなそれに對しては隨喜渴仰の涙を收めて辭す私では決してないのである。たゞ感傷のため感傷に墮してはならぬさいふだけである。作者一人の陶醉から萬人の陶醉を豫想されては堪らない。まづ現實をよく見るべきである。主観は出来るだけ抑壓しなければならぬ。リアリズムの洗禮は今の日本物にとつての大急務である。それからである、眞實に基礎付けられた日本映畫が咲く時は。うつかりしてゐるこのまゝいゝんな邪道に陥るか分らない。伊藤大輔氏若山治氏に對しては甚だ相濟まないがこの映畫を機會として日本の映畫製作者に一言苦言を申し上げたわけである。「流浪の旅」の批評としては少し脱線し過ぎたかも知れない。伊藤大輔氏若山治氏の映畫としては少し落ちる作品である。

一月五日 遊樂館 飯島 正
（注意。本映畫は關西に於ては昨年末封切されたものであるが、東京封切の日附に依つた。）